

## 法政大学学術機関リポジトリ

## HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# G. キャプランのメンタルヘルス・コンサルテーションにおける主題妨害低減法：コンサルティの個人的問題に由来する職業的客観性の喪失に対応する介入

著者	丹羽 郁夫
出版者	法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
雑誌名	現代福祉研究
巻	12
ページ	185-199
発行年	2012-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/7365">http://hdl.handle.net/10114/7365</a>

# G. キャプランのメンタルヘルス・コンサルテーションにおける 主題妨害低減法

—コンサルティの個人的問題に由来する職業的客観性の喪失に対応する介入—

丹 羽 郁 夫

【抄録】 本論文では、地域精神医学の世界的指導者であったG. キャプラン（1917－2008）が提案したメンタルヘルス・コンサルテーションにおける「主題妨害低減法」の理論と実践を概観する。この技法は、コンサルテーションで最も対応が難しいコンサルティの個人的問題が原因で客観性を喪失した状態にコンサルタントが介入する方法であり、コンサルティに自分の問題に気づかせることなく実施できる長所をもつ。これが成功すると、今後、コンサルティは類似した状況のケースに悲観的な予測をする同じ不合理な認知の型（主題）を示すことが減少する。また、この技法には、①言葉を用いたクライアントへの焦点づけ、②言葉を用いた置き換え対象への焦点づけ、③言葉を用いないケースへの焦点づけ、④言葉を用いないコンサルテーション関係への焦点づけ、の4つの方法があり、状況に応じて選ぶことができる。最後に主題妨害低減法の理論と実践上の課題を検討した。

【キーワード】 G.キャプラン      コンサルテーション      主題妨害低減法  
精神分析      コミュニティ心理学

## 1. はじめに

心理臨床における典型的なコンサルテーションは、心理臨床の専門家であるコンサルタントがコンサルティ（学校の教師、企業の上司など他職種の者）の抱えるクライアント（クラスの子ども、会社の部下など）の心理的問題をコンサルティに働きかけることで解消あるいは軽減する援助方法である。このコンサルテーションを行う場合で最も対応が難しいのはコンサルティがクライアントに不合理な認知をし、時に情緒的に混乱しているために適切に関わっていない場合である。この認知の歪みや混乱の背景にはコンサルティ自身に未解決の葛藤などの個人的問題が存在することが多い。だがコンサルテーションにおいてはコンサルティの個人的問題に焦点を当てる心理療法は行わない。この場合、コンサルティの個人的問題を直接扱うことなく、コンサルティがクライアントを適切に援助できるようにすることが求められる。しかし、これを行うことは容易ではなく、このための特別な

コンサルテーション技法はほとんど知られていない。そのためコンサルティの個人的問題が原因でコンサルテーションが行き詰ることは少なくない。

地域精神医学の世界的指導者であったジェラルド・キャプラン (Gerald Caplan: 1917–2008) のメンタルヘルス・コンサルテーションの考えは日本のコンサルテーションに最も大きな影響を与えている。そして、このキャプランは既に40年以上前にコンサルティの個人的問題を間接的に扱い、コンサルティがクライアントに適切に対応できるようにする技法を提案している。キャプランのコンサルテーションの考えは、教師へのコンサルテーションが求められるスクールカウンセラー事業の開始をきっかけに、主に山本和郎の『コミュニティ心理学』(1986)を通して日本の心理臨床領域に広く知られるようになった。しかしキャプランが提案したコンサルティの個人的問題を間接的に扱う技法であるTheme Interference Reduction (1978年に山本が『主題妨害低減法』と訳しているので、以降はこの名称を使用する) はほとんど知られることなく広まっていない。直接の要因には、山本(1986)の主題妨害低減法に関する解説が、その著書の性質上、それをもとに実施できるほど詳細なものでなかったことと、キャプランのコンサルテーションに関する著作(1970年の単著と1993年の娘との共著)が翻訳されていないことがあろう。より根本的な要因としては、主題妨害低減法が精神分析理論をその基盤にもっている点が考えられる。アメリカにおいては、学校領域の心理士にキャプランのコンサルテーションの考えは最も広まり、1970年の著書は1983年まで *Journal of School Psychology* で最も引用された書籍であったが、学校を基盤とするコンサルタントは精神分析の訓練を受けていない者が多く、主題妨害低減法は行わなかったのである (Caplan, Caplan, & Erchul, 1995)。アメリカで主題妨害低減法が広まらなかったことも日本での普及を妨げたと考えられる。

しかし、詳細は本論文で述べるが、主題妨害低減法の実施には精神分析の知識は必要であるが訓練は重要ではない。この方法はコンサルティの個人的問題によって表れた認知の歪みを精神分析的に気づくことは求められるが、その問題自体は追及せず、認知の歪みのみを修正するのである。表面的には認知行動療法と近いアプローチである。そこで、本論文ではキャプランのメンタルヘルス・コンサルテーションにおけるコンサルティの個人的問題に由来する職業的客観性の喪失に対応する主題妨害低減法を概観したい。

## 2. G. キャプランの主題妨害低減法の記述に関する変遷

キャプランの著作において、主題妨害低減法につながるアイデアは、最初は「部分的緊張低減法 (segmental tension reduction)」と「ステレオタイプ消失法 (dissipation of the stereotype)」(1959)として記述された。1963年にはキャプランのメンタルヘルス・コンサルテーションの基本的な考え

がほぼ形成され、「主題妨害低減法」の名前が登場している。そして1970年の著作でキャプランはメンタルヘルス・コンサルテーションと、その一部である主題妨害低減法の考えを完成させている。その23年後、機関の外部の者が行うコンサルテーションだけでなく、内部の者が行う場合のコラボレーションの考えを加え、キャプランは1993年に娘のルース（Ruth）と改訂版を出版した。主題妨害低減法の基本的な考えに関しては1970年版と1993年版の間に違いはほとんどないが、1993年版では記述が簡潔になり、表現を時代に合わせて変えただけでなく、より広い範囲のコンサルタントに受け入れられ実施できるように修正が若干加えられている。以上から、1993年版を最終的な完成版と見なし、この記述をもとに主題妨害低減法を概観する。

### 3. G. キャプランのコンサルティ中心ケース・コンサルテーション

キャプランはメンタルヘルス・コンサルテーションを4つのタイプに分類しており、その一つであるコンサルティ中心ケース・コンサルテーションにおいて主題妨害低減法を用いると述べている。このタイプのコンサルテーションでは、「コンサルタントの主な焦点はコンサルティの職業上の機能の不十分な点を解明して改善することである」（Caplan & Caplan, 1993, p.101）と述べている。つまりコンサルティ中心ケース・コンサルテーションの目標はコンサルティの職務能力を高めることが一次的なものであり、クライアントの改善は二次的なものである。コンサルティへの教育のために現在のクライアントを利用する側面ももつ。それゆえコンサルティ中心ケース・コンサルテーションにおける情報収集で重要なのはクライアントに関する客観的情報ではなく、コンサルティが提供する主観的情報である。つまりコンサルティの話しへの偏りや歪みを確定することが重視される。

#### （1）コンサルティがクライアントに適切に関われない4つの要因

コンサルティが特定のクライアントとの関わりで十分に機能できない場合の要因を、キャプランは知識の不足、スキルの不足、自信の欠如、あるいは職業上の客観性の欠如と分類した。そして、この4つの内、知識とスキルの不足および自信の欠如に関してはシンプルな介入で十分であるが、客観性の欠如に関してはもっと複雑な介入が必要と考えた。また十分に組織された機関でコンサルティ中心ケース・コンサルテーションが求められるのは客観性の欠如が原因であると指摘した。この場合のコンサルティのクライアントとの困難は、コンサルティがクライアントやその生活状況の登場人物との距離が近すぎるか遠すぎるためにクライアントを正確に見られず、保持する知識とスキルを十分に使用できなくて通常よりも効果的に機能できないことから生じる。

## (2) 客観性の欠如の5つの要因

コンサルティの客観性の欠如の原因を、キャプランは個人的感情によるのめりこみ、単純な同一視、転移、性格上の歪み、そして主題妨害の5つに区別した。そしてこれらの5要因は重複すると述べている。

①**個人的感情によるのめりこみ**：コンサルティがクライアントとの関係を職業的なものから個人的なものにしてしまうと客観性を失う。そしてコンサルティはクライアントのニーズを無視し、自分のニーズを満たすようになり、それに気づかない。例えば、患者と恋に落ちる医師や生徒の一人と母親的な関係を形成する教師などである。

②**単純な同一視**：クライアントやクライアントの生活状況の登場人物の一人に共感ではなく、同一視し、客観性を維持するのに必要な中立性を失う。そのためクライアントが葛藤状況に置かれている場合、同一視した人物の肩をもち肯定的で同情した発言をするのに対して、他の登場人物を非難する。単純な同一視は、年齢、性別、職業などの明らかな類似性によっても生じやすい。上記の発言と類似性によって同一視は確認できる。

③**転移**：転移による困難はコンサルティが自分のこれまでの人生における重要な関係からの役割パターンをクライアントに押しつけるために生じる。コンサルティはあらかじめ決められた固定した態度と予測でクライアントを見るようになり客観性を失う。この転移関係は類似したクライアントで繰り返される傾向がある。

④**性格による認知と行動の歪み**：このタイプの客観性の喪失は、性格上の問題があっても職務を適度に遂行できる範囲の小さな混乱の場合がコンサルテーションにもちこまれる。キャプランは正常な複数の生徒に有害な性的行動があると主張する性的行動化傾向をもつ教師を例として挙げている。

⑤**主題妨害**：キャプランは以下のプロセスを通してコンサルティの仕事に混乱をもたらすと述べている。「十分に解決されていない現実の生活体験や空想に関する葛藤は情緒的な調子を帯びた認知の型としてコンサルティの前意識や無意識に持続する」(Caplan & Caplan, 1993, p.122)。この認知の型が主題であり、これがコンサルティの過去の体験から引き継がれて現在のクライアントに置き換えられる。つまりコンサルティの過去の体験と現在のクライアントの類似性によって無意識が作用し、クライアントの問題を主題に一致するように見なしてしまう。その結果、コンサルティは客観性を失い、最悪のシナリオを予測し、解決可能なさまざまな方法を想像できなくなり職務に支障が生じるのである。この主題は三段論法の形式をとり、2つの認知カテゴリーの強い結びつきをもつ。認知カテゴリーAは最初の未解決の問題の特徴をもった状況（「最初のカテゴリー (initial category)」)を意味し、認知カテゴリーBは望ましくない結末（「避けられない結末 (inevitable outcome)」)を意味する。つまり、この三段論法は「Aは全て必ずBをもたらす」という定式をと

る。この一般化があらゆる場合に当てはめられ、Aに関わる人は全て必ずBを被るとなる。コンサルティは担当するクライアントのもつ一連の手がかりが最初のカテゴリーに等しいと見なすと客観性を喪失し、クライアントが避けられない結末になるという不合理で悲観的な運命を予測する。この主題妨害が発動するのは古い葛藤への防衛が弱まった時である。すなわちコンサルティは最初のカテゴリーに合う人をクライアントから無意識に選び、最初のカテゴリーをこのクライアントに置き換えて新しく防衛を形成して古い葛藤に気づくことを回避する。そしてコンサルティは予測する悪い結末が生じないようにクライアントに対して予防的な取り組みを行うが、混乱しているため有効でなく、予測を裏づけてしまう。このように主題妨害をもった専門家は最初のカテゴリーに一致するクライアントの援助を失敗し続ける。

### （３）主題妨害に対応する２つの方法

キャプランは主題妨害に対応する方法を２つ述べている。第１の方法は、コンサルティのクライアントに対する認識を最初のカテゴリーから離すことである。これはクライアントがもつ最初のカテゴリーに一致していると見なす手がかりが正確でないことに気づくように、あるいはクライアントが最初のカテゴリーに実際は一致しないと判断するように手がかりを解釈し直すようにコンサルティを援助することで行われる。この技法はコンサルティが主題をクライアントへ置き換えるのを止め、クライアントを主題から離すので、キャプランは「関係分離（unlinking）」と呼んでいる。この結果、コンサルティは現在のクライアントに対して客観的になる。しかし、この方法の短所は、主題が保たれているので、コンサルティは担当する他のクライアントに主題を置き換えて同じことを繰り返す可能性が高い点である。

第２の方法は、コンサルティがクライアントを最初のカテゴリーに一致することを受け入れた後、避けられない結末の根拠とする事実を再検討するように勧める。次に、コンサルティの予測は可能性のある結末の一つにすぎず、他にも複数の可能性があることに気づかせる。その結果、コンサルティがもつ避けられない結末への確信が弱められる。その後の関わりで、コンサルティは最初のカテゴリーと一致すると認知したクライアントに避けられない結末が生じないことを直接確かめることができる。この一つの例外によって三段論法を無効にし、主題を弱めるか消去するのである。このコンサルテーションの方法を「主題妨害低減法」と呼ぶ。これが十分に達成されればコンサルティの主題は弱まり、客観性を回復し、他のクライアントに主題の置き換えを繰り返すのを減らすことができる。この主題妨害低減法には２つの長所がある。一つは、コンサルティの認知面を検討するが、それは重要な情緒的要素を含むので、表面的なことを扱いながら心の深部に影響できることである。もう一つは、コンサルティの置き換えを受け入れた防衛の枠組みのなかで扱うため、コンサ

ルティの防衛を取り除かず葛藤に直面させないので、体面を保たせ、大きな抵抗を起こすことなく主題を無効にすることである。よってコンサルタントはコンサルティの葛藤の詳細を知ることなく、つまり私生活に侵入せずに主題を無効にできる。

#### 4. 主題妨害低減法の実際

キャプランによると、主題妨害低減法は、主題のアセスメント、コンサルタントの介入、そして終結とフォローアップの3つのステップから達成される。

##### (1) 主題のアセスメント

以下のフェイズを通して、求められているのはコンサルテーションなのか、コンサルティの仕事上の困難は客観性の欠如が原因なのか、主題妨害によるのか、最初のカテゴリーと避けられない結末はなにかに答えを出す。

①準備のフェイズ：求められているのがコンサルテーションなのかどうか、コンサルテーションだとすれば、どのようなコンサルテーションで扱うべきなのかを決める。この決定は以下のフェイズを通して進められる。

②フェイズ 1 (広い領域の浅い調査)：コンサルタントはコンサルテーションで出会うものへの準備を事前に行う。コンサルタントはコンサルテーションが要請される機関内部やそれを取り巻く地域の問題についての最新の情報の入手しておくことで、コンサルティが提出するものの意味を迅速に理解して対応できる。そしてコンサルテーションの面接に向かう途中においても、建物の廊下や部屋の雰囲気、迎えられる方に示される言語的および非言語的の手がかりは機関を理解する上で重要である。特に非公式の情報を多くもつ受付などの態度はコンサルタントに対する機関の見方やコンサルティの相談内容の緊急性などの情報を提供する。またコンサルテーションを求めたのはコンサルティの意志なのか、管理者の意志なのかに注意を払う。コンサルティの意志でない場合、管理者側に客観性の欠如があるか、コンサルティ側に特別な問題が存在するかに注意する。そして面接室に入るとコンサルティに集中し、機関に関する事前情報を役立てるが、それによって先入観をもたないよう注意する。最初は、コンサルティ中心ケース・コンサルテーションで扱うべきケースであるかどうかを確認し、その後、コンサルティが仕事上の問題をもっているかどうか、その原因は何かを検討する。

③フェイズ 2 (コンサルティの行動のアセスメント)：コンサルティがクライアントに対して個人的感情でのめりこんでいる程度と性質をまずアセスメントし、これが除外できない場合は主題妨

害を抱えていると推定して進める。それでも主題を確認できない場合に主題妨害の可能性を除外できる。主題妨害の要因の一つである個人的感情によるのめりこみを示す証拠には面接時にコンサルティが示す情緒的反応と認知的反応がある。

(a) **情緒的反応**：正常な情緒的反応なのかどうかを区別する必要がある。そのため、そのコンサルティやその職業と機関における通常の行動との相違に注目する。また誇張した話し方やコンサルティの示す不一致、例えば本当の気持ちを隠して落ち着いているように見せる姿勢をとっているかどうかに注目する。そしてコンサルティの話のどの登場人物や要素と情緒的緊張の高まりとが関係しているかを確かめる。関連すると思われる焦点から一時的に話を離して緊張が低減するかどうか、さらに戻して再び混乱するかどうかを確認する。話を緊張と関連する焦点から離すことは、過度に混乱するのを防ぐことで、コンサルティが置き換えによる安定を失って自分の個人的感情によるのめりこみに気づくのを避ける点でも重要である。またコンサルティにさまざまに話を繰り返させれば、混乱と関係する側面をより正確にできる。

(b) **認知的反応**：重要なのは、コンサルティが報告するクライアントの人生ドラマにおける特定の登場人物や状況に関して明確でないことやステレオタイプ化の存在である。明確でない点はケースの報告が詳細でないことが有益な手がかりである。例えば、家族の特定の人物について語られないことである。その場合、すぐに質問せず、後で防衛を危険にさらすことなく、さりげなく尋ねる。コンサルティが「知らない」と答えたら、「どんな人だろう」と想像を促すことでコンサルティから主題妨害に関連する投影的物語を引き出すことができる。そして、もう一つの特徴であるステレオタイプに関しては、客観的評価をもとにせず、既成のイメージでクライアントのドラマのなかの登場人物や状況を認知している証拠を探すことが求められる。ステレオタイプは以下の特徴をもつので見分けられる。ステレオタイプでは、生の現実よりも明確で一貫しており状況の変化によっても変わらない。また生の現実よりもかなり英雄的か残忍な性格をもつ。そして登場人物を誇張し、過度に単純化し、全て黒か白、善か悪と見なしている。さらに情緒的な調子をもつ言葉やきまり文句を用い、一般的な表現のリストを引用しているかのように表現する。このようなステレオタイプで認知された表面的な表現がある場合、後でコンサルティに尋ね、この認知の根拠を明らかにし、それがコンサルティの職業がもつ下位文化のなかで適切なものかどうかを確認する。この時コンサルティが自分の話の矛盾に気づかないよう注意を払う必要がある。

(c) **最初のカテゴリーのアセスメント**：主題妨害を探索するには三段論法の「最初のカテゴリー」と「避けられない結末」を示すものをコンサルティの話のなかから探さなければならない。最初のカテゴリーを探索するポイントはステレオタイプのな歪みや不適切な評価をして情緒が過剰に付与されている事柄を見つけることである。そして最初のカテゴリーを明確にするには、ケース



に対してコンサルティがもつ情緒的側面を明確にし、それを活発にするケースの特定の状況を確定することが重要である。キャプランは全て父親が異なる三人の非嫡子のいる女性を魅力的に、そしていくらか嫌悪を示して語る看護師の例を挙げている。コンサルタントは看護師であるコンサルティのもつ最初のカテゴリーを「ふしだらで多くの男性と性的な関係を繰り返している女性」と仮説を立てた。さらにコンサルティにとって必要以上に意味をもつケースの要素（これをキャプランは「前提条件」と呼び、コンサルティの主題を活発にするものとして重視した）を探ったところ、コンサルティは、この女性が子ども時代に父親が殺され、母親がだらしない生活を送っていたという剥奪体験をもっているという投影の可能のある物語を語った。以上からコンサルタントは最初のカテゴリーを「母親が不品行であり、その母親に育てられたために、成長して頻繁に多くの男性と性的な関係をもつふしだらな女性」へ修正した。

(d) 避けられない結末のアセスメント：コンサルタントはコンサルティの最初のカテゴリーを確定したら、避けられない結末の探索へと進む。それは常に悪い運命の形をもち、最初のカテゴリーをもつ人やその人のもつ部分に結びつけられている。この探索は3つの段階で進められる。1) 一般的な言葉で、犠牲者と予測される悲惨な結末を確定する仮説を立てる。2) この仮説を裏づけるためにコンサルティにさまざまな観点から繰り返し話をさせる。3) 予測される結末の具体的な詳細を確定するために、さらに探索する。この場合に用心しなければならないのは最初のカテゴリーを確定するまで避けられない結末を詳細に調べないことである。キャプランはクラスの子どもの1人が精神障がい者になり精神病院に入るという予測を感情をこめて語った教師の例を挙げて説明している。このケースでは上記の避けられない結末が先に確定された後に「子どもが多く、子どもたちの世話を十分にできない無能の母親」という認知（最初のカテゴリー）が結びついていることがわかった。上記の例に関して最初のカテゴリーがまだわからないコンサルタントなら、「子どもが多くて家庭の負担が大きくても母親に強さがある」という事実に基づいた見解をうっかり言うてしまう可能性がある。そうすると、この母親を最初のカテゴリーに当てはめるのを弱め、コンサルティを主題から離してしまうだろう。補足すると、「関係分離」を意図せずに行きことになり、コンサルティのケースに対する客観性は回復するがコンサルティの主題は保たれてしまう。

## (2) コンサルタントの介入

以上のような主題妨害を低減する介入は、既に述べたように、主題を表す2つのカテゴリー間の拘束力のある結びつきを無効にすることである。そして、これを実行する影響力をもつにはコンサルタントはコンサルティとの適切な情緒的関係をまず形成することが介入を実施する前に必要である。キャプランは、この結びつきを弱めるためにコンサルタントが選択できる4つの技法を提案し

ている。それらは、①言葉を用いたクライアントへの焦点づけ、②言葉を用いた置き換え対象への焦点づけ、③言葉を用いないケースへの焦点づけ、そして④言葉を用いないコンサルテーション関係への焦点づけ、である。

### ①言葉を用いたクライアントへの焦点づけ

これは主題妨害低減法で最も多く用いられる典型的な技法である。この技法ではコンサルタントはクライアントに関する事実と一緒に検討し、避けられない結末が論理的に可能性のある一つであるが他の可能性もあることを例を挙げて示し、コンサルティが予測するほど悪い運命ではない可能性を示す。この時、コンサルタントは抽象的な概念用語でコンサルティがもつ主題をはっきり伝えてコンサルティが自分の問題に気づかないように用心する。直面化は大きな不安を引き起こしコンサルテーションを心理療法にしてしまう危険があるので、コンサルタントは話をクライアントに関する内容に制限すべきである。また、コンサルタントは一つの発言でシンプルに直接伝えるのではなく、コンサルティが提出する一つ一つの素材に対して他の可能性を伝え続けることが有効である。

この介入の例として、キャプランは8人の子どもがいる30代の美しい婦人から夫と離婚することを告げられてショックを受けたことを報告した看護師を取り上げている。看護師であるコンサルティは、この婦人が人生をもう一度やり直そうとする気持ちに最も困惑しており、このことを強く急いで話す調子に感情的にのめりこんでいる徴候が表れていた。そして、このコンサルティは「離婚や死別で男性を失う（最初のカテゴリー）と女性はすぐに性的衝動をコントロールできなくなる（避けられない結末）」と考えていることが明らかになった。さらに語るうちに、コンサルティは自由に衝動を満たすことができるこの魅力的な若い離婚する婦人への魅惑された強い同一視も示し、職業上の客観性を失っている証拠をさらに加えた。おそらくコンサルティ自身に性的欲求とそれが満たされない歴史が存在し、それを婦人に置き換えていると考えられた。そこでコンサルタントは、このコンサルティの言う危険を可能性のある一つの結末としてまず受け入れた後、他にも多くの可能性が想像できることを述べた。次にコンサルタントはコンサルティが提供した情報を用いて、この婦人のパーソナリティには他の結末へ進む可能性のある強さがあることを示した。

1週間後の2回目のコンサルテーションでは、コンサルタントがコンサルティに婦人について知っていることを話すように促すと、婦人がパーソナリティの強さと生活の多くの領域での能力をもつことを示す事実が語られた。それをもとにコンサルタントは、この看護師が人生の深刻な崩壊に対処できている可能性があることを言った。その後、この婦人が誰かと親密な関係になっても世界の終りになるわけではないこと、困難に巻きこまれても、それを乗り越えた多くのケースをコンサルティもコンサルタントも知っていることを語った。約1カ月後の話し合いでは、コンサル

ティはこの婦人について簡潔に語り、より職業的な態度を示し、婦人の性的な側面への強い関心を示さなくなった。これはコンサルティのもつ主題が弱まったことを示す。

## ②言葉を用いた置き換え対象への焦点づけ—たとえ話

言葉で直接クライアントに焦点を当てずに「たとえ話」を用いるのは、コンサルティの置き換えが危険な状態にあり、それに気づこうとしている場合である。この場合、コンサルタントは話をクライアントから離して、コンサルティの主題に影響できる表面上は異なるが同じ内容を表わすたとえ話をする。たとえ話は聞く者が体面を失うことなく密かに同一視する対象、すなわち置き換え対象を提供し、その行動の成否を自分のことのように体験することを可能にし、変化を起すメッセージを伝えられる。コンサルテーションで用いるたとえ話はコンサルティの主題を表す創作した逸話であり、避けられない結末は最初のカテゴリーから生じる可能性の一つにすぎず、他の結末を体験できることを示すものである。そして、それは本当らしく聞こえなければならない。

この介入の例として、キャプランは精神遅滞があるが魅力的なパーソナリティをもつ少年の評価を提出しない総合病院への怒りを話しにコンサルタントのところに来た看護師を述べている。この例は少々複雑なため重要な点に絞ると次のようになる。コンサルタントには病院への非難は看護師であるコンサルティの個人的な気持ちの置き換えのように思われた。その後、コンサルテーションが進むにつれてコンサルティの主題の緊張が弱まり、防衛的な置き換えが低下し始めた。おそらくコンサルティの家族に精神遅滞や脳損傷の歴史があると思われ、コンサルティ自身の人生で最初の心配の対象であった人物について話し始めようとし、少なくとも意識しつつある危険があると思われた。そのためコンサルタントは話をクライアントである少年から離し、創作したたとえ話を用いて介入した。

コンサルティはこの少年が入る予定の特殊学級を2度も訪問（個人的感情でのめりこんでいる表れ）し、そのクラスがダウン症や重度の障がいのある子からなることを確認していた。そしてコンサルタントは、コンサルティが障がいのある子たちを「異様な小さな怪物」であるかのように考え、そこに愛らしいクライアントを入れることは適切ではないと心配していることがわかった。そこでコンサルタントは、その心配を軽減させるため、障がいのある子どものクラスを受けもっている友人がいる話を創作し、その友人から子どもたちが一人一人違うパーソナリティをもっていることを聞いていて、自分がこの子どもたちが大好きであり、直接知っているように感じると話した。特に、普通と異なる外見にもかかわらず人間的なパーソナリティがちゃんとあるというメッセージを伝えるため、脳水腫の子どもを取り上げ、バランスの悪い歩き方で友人のところまで来る様子を描写し、一方で、とてもいたずらで、しつけが必要なことを語った。しつけが必要であることを加えたのは、

このコンサルティにとって、しつけは人間として見なす上で重視すると考えたからである。この話を聞きながらコンサルティは目をこすり始め、心を動かした。このコンサルティの主題は「脳の障がいがあるか精神遅滞の人は異様で異常に見えがちであり、他の人から人間でないかのように拒絶され、結果としてうまくいかない」というものである。避けられない結末が十分に明確にされていないが、コンサルタントのたとえ話を聞いた介入は精神遅滞（最初のカテゴリー）は人として見られず拒絶される（避けられない結末）という予期を軽減した。

### ③言葉を用いないケースへの焦点づけ

この方法は予測された避けられない結末について余り心配する必要があるというメッセージをコンサルタントの行動でコンサルティに伝えるものである。具体的には、コンサルタントが不安を示すことなく結末について話し合うことであり、例えば、急がず、次のセッションまで話し合いをもち越すことを落ち着いて話すことでコンサルティが予測するような悪い結末が起きそうもないことをほのめかすことである。この例としてキャプランが挙げたのは、前に例として述べた性的衝動コントロールを失いそうな離婚する婦人についての相談をもちこんだ看護師である。このケースでは、コンサルタントが次のセッションまで話し合いを持ち越して事態の成り行きを見守ることを述べることで心配する必要のないことを示す介入を行った。しかしコンサルタントに緊張や切迫感がないことは、ケースが危険かどうかをコンサルタントがちゃんと理解しているとコンサルティが思う場合のみ主題低減の効果をもつ。そのように思われない場合、コンサルタントはケースを理解していないか、関心がないものとコンサルティは受け取る。そのためコンサルタントは複雑な問題を積極的に解明しようとし、最初のカテゴリーと避けられない結末両方を十分に認識していることをコンサルティに伝えることが大切である。

### ④言葉を用いないでコンサルテーション関係への焦点づけ

コンサルティが自分の個人的問題を仕事の問題を通して扱っていることは、このコンサルティは防衛として置き換えを用いがちであることを意味する。そして、クライアントへの置き換えは最近のことであり、まだ固定されていないためクライアント以外の他の対象（たとえ話の登場人物やコンサルタント）にも容易く置き換わる可能性がある。したがってコンサルタントはコンサルティが主題をコンサルテーション関係で行動化する可能性に常に用心すべきである。これに気づいたら、コンサルタントはコンサルティがケースに対して表している主題とコンサルタントに対して転移で表している同じ主題を同時に扱う必要がある。そしてコンサルタントとの関係は直接言葉で扱うことなく、ケースへの言語的および非言語的応答を通してのみ間接的に働きかける。

この技法の例として、キャプランは妊娠している若い婦人についてのケースで相談に来た看護師を挙げている。看護師であるコンサルティは、この婦人の夫であるトラック運転手は力がとても強く無口で大酒のみであると表現した。そして、婦人はRh(-)の血液型をもっているので、血の不一致により出産時に大量輸血が必要となって胎児に脳損傷を引き起こす可能性を避けるため、血液検査などで見守っていると報告した。この心配の根拠となる徴候はなかったが、コンサルティは損傷を受けた赤ちゃんが産まれたら夫が妻に不義を犯して去っていくことをとても心配していた。また夫が妻を軽視して不当に扱うことも予測した。話が展開するにつれて、コンサルタントはコンサルティが自分に対して臆病に振る舞い始めていることに気がつき、面接の終わりには、このケースのことでコンサルタントを困らせることへの躊躇、コンサルタントの多忙さ、このケースをコンサルタントがフォローし続けることが必要ないことについてコンサルティは語った。なお、このコンサルティは小柄であり、コンサルタントは背が高かった。

以上から、コンサルタントはコンサルティの主題を「大きくて力の強い男性との関係を形成し、その男性に依存するようになった弱くて無力な女性は、決まって、その男性から不当に扱われ、軽視され、女性の要求が高まって男性にとって厄介になると捨てられる」と定めた。そして、この主題はケースとコンサルテーション関係に表れていた。もし夫が妻に不実であり拒否したとしたら、また力の強いコンサルタントが看護師をあごで使いケースに無関心であることを示したら、この主題の予測は正しいことになる。そこでコンサルタントはこの主題を2つの並行した方法で扱った。まず夫と妻との力の差についてのコンサルティの見方に同意し、夫が妻にひどいことをするというコンサルティの根拠について話した。すると夫は出産に向けてあらゆる方法で助けようとしていることが明らかになった。さらにコンサルタントはRh(-)の妊娠期間中の問題に関する最新の看護研究を勉強して引用し、自分が強く有能であることを示した。補足すると、これはコンサルタントを信頼できる人物にすると同時に、最初のカテゴリーに一致することを強調するために行ったと推測される。その後、コンサルタントは看護師の専門性への尊重を強調することで、コンサルティがケースを主題に合うように操作する可能性を防いだ。さらにコンサルティは、看護師は忙しい職業であると伝え、面接をコンサルティの都合に合わせるように気をつけ、情報収集に関してコンサルティに指示をせず（あごで使わず）、コンサルティの観察によって明らかになった点を高く評価し、このケースへの強い関心を示し、多くの回数のコンサルテーションを希望し、必要な時は会える（要求が高まっても決して拒否しない）こと伝えた。そしてコンサルタントはこれらを声の調子、行動、態度でもコンサルティに示した。この二重のアプローチの効果は顕著であり、2回目の面接ではコンサルティの緊張は弱まり、夫を巨大な野獣ではなく妻を助ける人として評価した。同時に、コンサルタントに対する態度も変化し、通常の職業上のスキルと有能さを取り戻した。コンサル

ティの主題は弱められたのである。

### （３）終結とフォローアップ

コンサルタントは主題の２つのカテゴリーの間のつながりを断ち切ることができ、コンサルティの緊張が低くなり共感と職業上の客観性が通常のレベルに戻ったら面接を終わらせる。コンサルティが自分でケースに対応するようにし、以前は対処できなかった課題を自分で克服したと体験することが重要である。コンサルテーションは通常３、４週間の間に１回から３回の面接で達成される。コンサルティが実際にクライアントに関わる時はコンサルテーションが終結しているので、フォローアップを設定して結果の報告をひかえめに求める。最善の方法は他のケースで援助を求められることを歓迎し、今回のケースで何を学んだか興味があると言ってセッションを終えることである。コンサルタントは自分の職務を改善する指標としてケースの成功の程度をある程度知る必要がある。この時、コンサルティが主題に気づかないように気をつけなければならない。また、その後継続して会うことで主題が徐々にコンサルティの職務を妨げなくなることは、その主題の影響が全く消えることやコンサルテーションを求めなくなることも説得力のある証拠である。後者の２つはコンサルティが自分の主題に気づいて自分の個人的問題をクライアントを使って扱うことを守るために、コンサルタントに隠していることやコンサルタントを避けている可能性がある。

### （４）グループでの主題妨害低減法

主題妨害低減法は個人コンサルテーション用に開発されているがグループで行うことも可能である。そしてグループには時間の効率と心理療法に陥る危険性の減少で利点がある。しかし話し合う内容をコントロールしにくいという短所も併せもつ。後者に伴う危険は、心理学の知識をもつ者がグループにいとコンサルティの防衛に気づいて置き換えを見抜いて、それを暴露してしまうことである。これを防ぐには参加者の私生活について話すのを禁止する基本的なルールを最初に設定することが重要である。また長所に関連して、参加者に共通する主題妨害があり、それを扱うことができることより効率的である。

## ５．主題妨害低減法の課題

G.キャプランの主題妨害低減法について概観したが、理論と実践面で課題がいくつかあると考えられる。

第一に、主題妨害低減法と客観性の欠如に関する主題妨害以外の４要因との関係が明確でない。

この関連についての筆者の推測は次の通りである。キャプランは、最初、客観性の欠如は全て主題妨害を形成し、主題妨害低減法で対応できると考えていたようである。1963年の主題妨害低減法に関する初期の記述（客観性欠如の要因はまだ十分に明確にされていない）では、主題妨害低減法が客観性の欠如全てに対して有効であると述べている。しかし、その後、客観性の欠如が全て主題妨害を形成するわけではないと考えたと思われ、1970年以降では主題妨害を客観性の欠如要因の一つとして挙げ、他の4要因と区別している。そして他の4要因に関しては主題妨害低減法を用いない方法を紹介している。だが他の4要因も主題妨害を形成すると考えており、キャプランが記述する事例には主題妨害が表れる要因として他の4要因、特に個人的感情によるのめりこみ、単純な同一視、転移が影響している。つまりキャプランは主題妨害以外の他の4要因によっても主題妨害が生じ、その場合は主題妨害低減法が使用できるが、主題妨害が生じない場合は主題妨害低減法以外の介入ができると考えていたと思われる。以上のように客観性欠如の5要因は相互に関係していると考えられ、キャプランのように並列して単に重複すると記述するのではなく、その関係を検討し整理する必要がある。

第二に、主題妨害低減法の一つである「たとえ話」を用いて介入する方法には倫理的問題があると思われる。架空の話を作ってコンサルティの認知を変える方法は、コンサルティとクライアントのためであるとしても、嘘をついて操作する側面をもつと考えられる。現代ならインフォームド・コンセントの点で問題をもつ可能性がある。守秘義務に触れない範囲で実際の話を用いるなど、方法の修正を検討する必要があるだろう。

第三に、介入の組み合わせが検討されていない。キャプランの事例では言葉を用いない2つの方法は言葉を用いる方法と併せて使用されており、言葉での介入を補い、より効果を高めるように用いられている。この介入の組合せに関してキャプランは特に記述していないため、有効に組み合わせる方法に関して検討することは重要である。

第四に、事例の偏りと少なさの問題である。キャプランが例として挙げたコンサルティのほとんどが看護師であり、それも影響して、述べられた主題とクライアントに偏りがある。また主題妨害低減法はアメリカにおいても日本においてもほとんど試みられていない。日本でコンサルテーションが用いられることが多い学校現場などで主題妨害低減法を試みることが期待される。この技法が日本の臨床現場に適用できるものかどうかを確かめること、適用の可能性があれば事例を蓄積して、多様なケースに対応でき、より有効なものに洗練することが必要である。

以上、キャプランが提案したコンサルテーションにおけるコンサルティの職業上の客観性の欠如に介入する主題妨害低減法の概観とその課題を述べた。この技法は実践の蓄積が少なく、理論と実践面でまだ課題をもつが、コンサルテーションで最も対応が難しいコンサルティの個人的問題を扱

うことができる数少ない方法の一つとして試みる価値はあるだろう。なお本論文は筆者による簡略化した主題妨害低減法の概観にすぎない。この技法に関心をもたれた方には1993年の原著を読まれることを勧める。

#### <参考文献>

- Caplan, G. (1959) *Concepts of Mental Health and Consultation: Their Application in Public Health Social Work*. Washington. D. C.: Children's Bureau Publication, No.373.
- Caplan, G. (1963) Types of mental health consultation. *American Journal of Orthopsychiatry*, **33**, pp.470-481.
- Caplan, G. (1970) *The theory and practice of mental health consultation*. New York: Basic Books.
- Caplan, G., & Caplan, R. B. (1993) *Mental health consultation and collaboration*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Caplan, G., Caplan, R. B., & Erchul, W. P. (1995) A contemporary view of mental health consultation: Comments on "Types of mental health consultation" by Gerald Caplan (1963) . *Journal of Educational and Psychological Consultation*, **6**(1), pp.23-30.
- 山本和郎 (1978) 総説 コンサルテーションの理論と実際 精神衛生研究, **25**, pp.1-19.
- 山本和郎 (1986) 『コミュニティ心理学：地域臨床の理論と実践』 東京大学出版社